

茶  
合  
院





故宮

元大都



元四合院 敷地

### 敷地 北京・宣武区

明・清代に建てられた、北京内城九門の一つ「宣武門」(現存しない)の西南に位置する宣武区には、全国から上京した様々な民族の人が集まり、伝統住宅四合院に雑居している。しかし従来の四合院は一族の住宅として設計された建築様式で、プライバシーを守るために外部に対し閉鎖的で、内部の中庭に開いており、雑居化した居住空間の需要を満たせないまま。

現在の他民族共生の居住状態では、同じ院落中でしかコミュニティが生まれず、四合院と四合院の間に繋がりが少ない。また、同じ民族の人だけで交流し、全く違う文化を持つ人とほぼ交流しないことが多い。

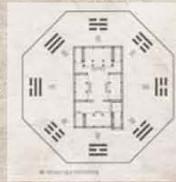
### コンセプト

全国から地方出身の人が集まる北京市宣武区に、7つの民族が共同生活を行う住宅を提案する。中国伝統住宅様式四合院の従来の形を崩し、宗教も性格も生活習慣もそれぞれでありながら、日頃の共同生活から文化の違いを超えていく。

### 四合院の変遷

約 3000 年前 商周時代

住宅建築の基本形態として初めて採用される



1271 年 元



クビライは元大都(現北京)を這宮胡同を基本的な都市機構とし、胡同を構成した建築は四合院である

1368 年 明

官僚、金持ちが京城に転居四合院に対しより大規模な建設が始まる建築様式と色彩が豊富になる



1972 年 清

滿族人と漢族人の暮らす地区を分別する制度を実行

清代後期、長年の戦争により生活困難となり、四合院生活を維持できない家族は一部を賃出、一族が所有していた四合院の居住状態は多世帯雑居と変化する

1949 新中国成立

社会性質の変化により、過去に貴族に属していた四合院建築は国家財産となり、国营会社の社員寮として利用されることが多い。四合院の居住者はさらに大きく入れ替われ、多世帯が雑居する状態が一般的となり、「大雜院」とも呼ばれるようになった。

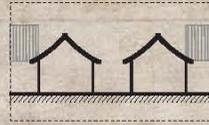
現在

急速な経済発展につれ、都市建設の進行により9割以上の四合院は取り壊され四合院の保存と再生について多くの課題を抱えている。

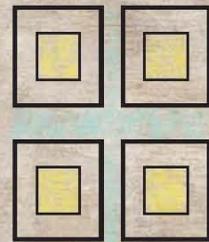
### 形態操作



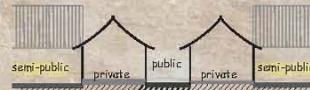
四合院それぞれの中庭でコミュニティが生まれるが、異なる四合院の間に交流が少ない。



中国伝統住宅として、従来の四合院の屋根は平面ではなく、曲率を持つ緩やかな曲面である。



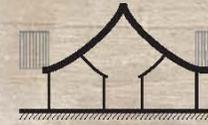
従来の四合院はプライバシーを守るために外部に対して閉鎖的で、内部の中庭に開いている。



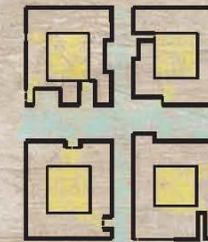
元々一族が所有する中庭は多世帯が共用することによってセミパブリック空間となり、四合院外部の路地はパブリック空間である。



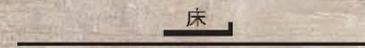
隣接する四合院の一部を大屋根でつなぎ、四合院の間に共用空間ができ、新たなコミュニティが生まれる。



大屋根にさらに大きな曲率を与えることで、中庭以外に多様な屋外空間が作られる。



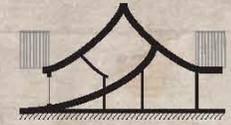
それぞれの四合院の外壁を凹凸させ、ガラスやルーバーを用いて隙間をあけることで内部空間と外部空間をつなぐ。



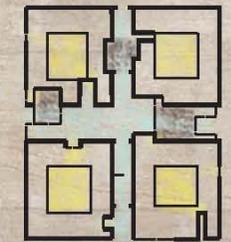
パブリック空間である路地の上にスラブを持ち上げ、それぞれのパブリック空間からアクセスできる新たな交流の場となる。



さらに大屋根に穴をあけ、四合院内外の視線をつなげる。



曲面屋根の一部を地面に下し、隣接する四合院の中庭まで伸ばすことで、元々閉鎖的な四合院に隙間ができ、隣接の四合院との境界を曖昧にする。



凹凸させた外壁によって路地空間に新たな小空間ができる。路地を生かし、四合院の外部に多様な共用空間を作る。



持ち上げたスラブをプライベート空間に差し込み、さらにレベルをずらすことで、個々の個人領域を完結せずに空間を連続させる。



月亮門（ムーンゲート）で隣街を仕切る同時に路地空間を連続させる。



構造物の形態操作によってそれぞれのプライベート空間とパブリック空間が分かれていながら繋がっている。



7民族共用の半屋外茶室



隣接する階層に差し込む風を、そこから捨てる全体。

### 配置計画



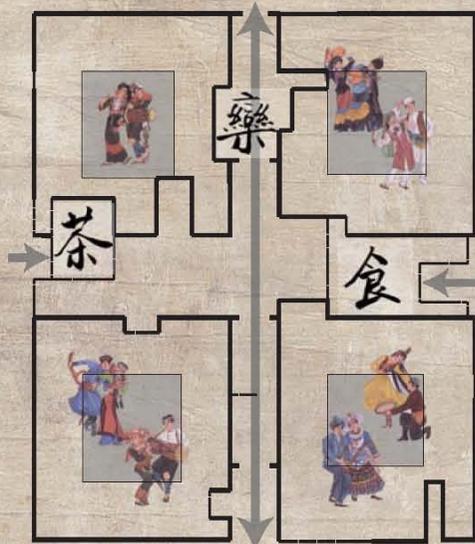
◇七つの民族の宗教、習慣、食文化や生活リズムなどの相違をふまえ、近い文化を持つ民族に共同活動を行う共用空間を設ける。

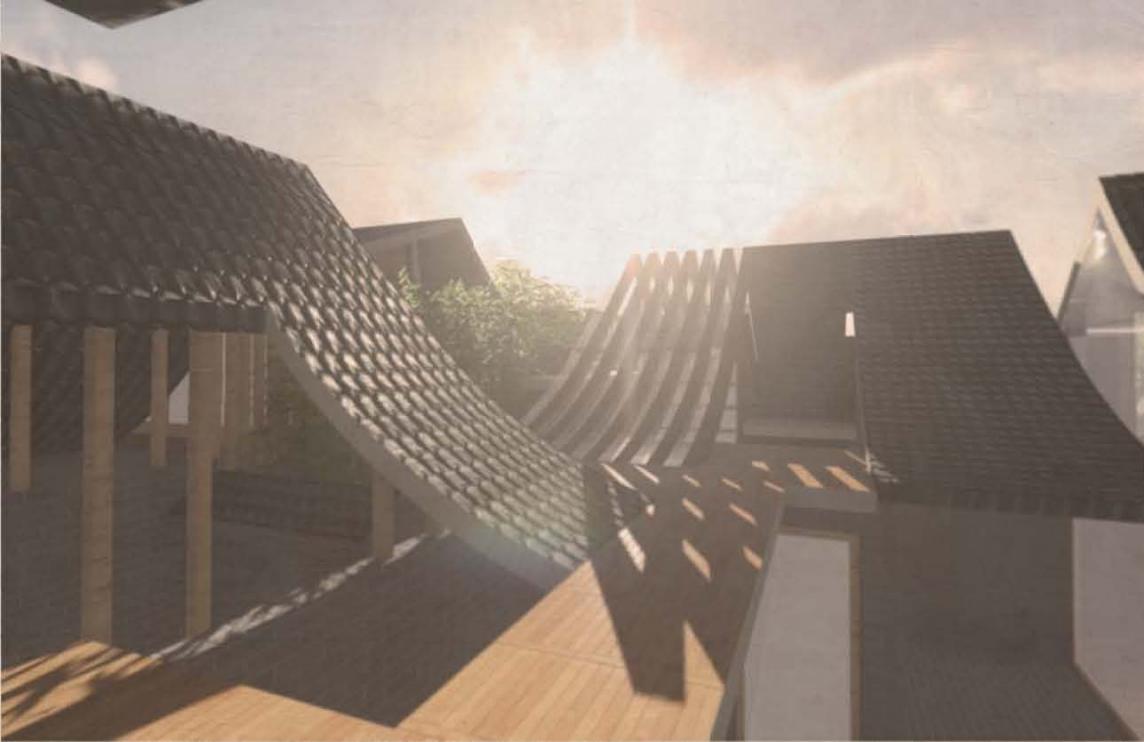
◇異なる文化をもつ民族の居住空間は完全に隔断されることなく、屋根、壁、床で行われた形態操作により、分けながら繋がる。

◇路地空間に7つの民族ともアクセスできる「茶」「食」「戯」3つの共用空間をつくる。

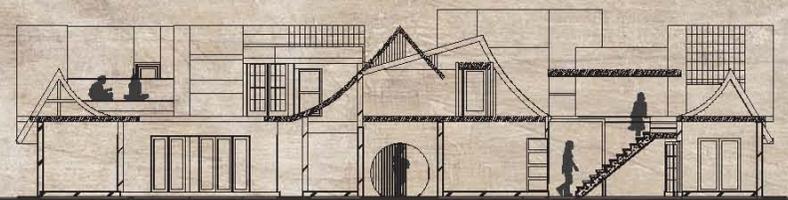
- 茶 お茶を最も大事にする徳昂族がおもてなしする茶室
- 食 お祭りに民族それぞれの伝統料理をシェアする半屋外ダイニング
- 戯 7民族及び敷地外の人が回遊する露天シネマ

◇南北方向の路地を開放し、東西方向の路地にルーバーで仕切ることで境界を曖昧にし、7民族の生活とその他多民族の生活を連続させる。

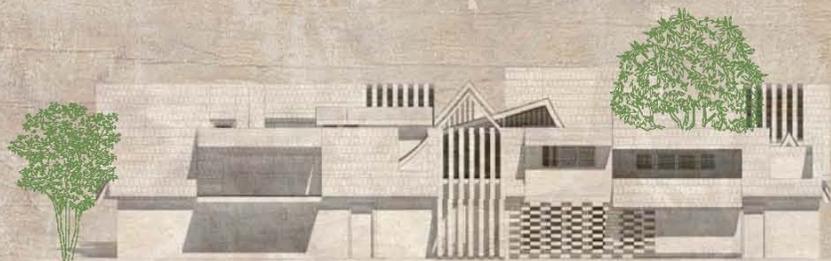




西立面图 S=1/100



AA' 断面图 S=1/100



南立面图 S=1/100



BB' 断面图 S=1/100



# 蒙古

モンゴル族

人口  
人口は 480 万 6849 人。モンゴル系。

居住地域  
主に内蒙古自治区に集中しており、その他は新疆、青海、甘粛、黒龍江、吉林、遼寧、寧夏回族自治区、河北、四川、雲南、北京などの蒙古族自治州、県地区に居住。

言語  
アルタイ語系蒙古語派に属する蒙古語を使用。内蒙古、バル虎布利固特（バルコ・ブリアート）、察拉特（オイラート）という3種類の方言がある。13世紀初めにウイグル文字の表音字母をもとに蒙古文字が生まれ、その後チベット文字を基礎とした縦書きの表音モンゴル文字（ハスバツ）が作られた。

歴史  
モンゴル族の発祥の地は内蒙古。現在のウレンベイル湖エルダグ河の両岸の密林地帯で、室韋族から分離し蒙古室韋と呼ばれていた。その起源は匈奴説、チウルク説、吐蕃説、東胡鮮卑説があり、言語や風習などから中国では東胡鮮卑説に傾いている。  
蒙古室韋族はその後次第に西へと移り多くの部族集団に広がり民族共同体が形成され、一部族名であった“モンゴル”が民族の名称になった。  
1206年にテムジン（チンギス・ハーン）が蒙古の大汗に推戴され、蒙古国を建国。前後してオゴタイハン国、チャガタイハン国、キプチャクハン国、イルハン国の4つの王国を建国し、吐蕃王国を降参させ、西夏王朝、契丹、女真、ウイグルと南宋を滅ぼし、1271年元朝を築いて併合した民族をモンゴル民族に統合させた。  
1360年代に明王朝に滅ぼされた後、モンゴル族は内部分裂し、外モンゴル（現モンゴル国）、内モンゴル、ジュンガル盆地の3地域に広く居住した。

住居様式  
住居は包（パオ）と呼ばれるテント型移動式家屋。モンゴル語ではガルと言う。木の骨組みの上をフェルトでおおつ。径4〜5m、高さ25mぐらいで、数百人収容できるものもある。

食文化  
スライス入りのたれにつけた羊肉の焼肉（ジンギスカン料理）や、モンゴル語で“アキラグ”と呼ばれる、馬乳を発酵させて作る馬乳酒（乳酸飲料で弱いアルコール分がある。）、密花薬酒で蜂の腹部で馬酔をかたどった装飾がある馬頭琴（モンゴル語で“モリフホル”と言う）が有名。



家族構成：夫婦

アトリエ事務所を運営し、瑶族夫婦とキッズ、リビングをシェアする。



共有スペース  
個人居住スペース



# 瑶

ヤオ族

人口  
213 万 4013 人。チベット系。

歴史  
瑶族のルーツは秦・漢代の“南蛮”、“長沙蛮濮蛮”、“莫徭”、“蛮徭”であるとみられており、歴史の古い民族の一つである。紀元前3世紀から紀元2世紀にかけて湖南省北部一帯に居住し、5〜6世紀南北朝、13〜17世紀には南に乗り現在の居住地域一帯に落ち着いた。

名称  
瑶族には“勉”、“金牙”、“布努”、“拉瓏”、“南多優”など63種類の自動がある。また、居住地域や服装、髪飾り、職業などによって、盤瑶、山子瑶、頂板瑶、花藍瑶、过山瑶、白口瑶、紅瑶、藍田瑶、八排瑶、平地瑶、オウ瑶、茶山瑶、背簾瑶など300種の異なった呼称がある。

居住地域  
主に広西壮族自治区に居住しているが、湖南、雲南、広東、江西、海南などの省にも居住している。

言語  
漢語-チベット語系瑶語瑶族語分支部に属する瑶語を使用。勉語、布努語、拉瓏語の3方言に大別されている。各地で言語の差異が大きく、互いに通じない。自民族の文字を持たず、漢語の文字を使用している。

宗教  
標に“盤古”を崇拜しており、道教の影響も強く受け、巫術にも通じている。

食文化  
瑶族には虫のさなぎを好んで食べる習慣があり、特に盤瑶や藍瑶のさなぎを食する。

祝日  
瑶族最大の祝日は旧暦10月16日に行われる盤王節で、この日は豊作を祝うと同時に、若い男女のお見合い的な要素も含まれている。その他にも“姑娘節”、“盘皇節”、“盘王歌”、“歌堂節”、“干巴節”、“連安節”、“夕九節”など多くの民族色豊かな祝日がある。



家族構成：夫婦

東側の四合院に居住するミャオ族民と近い文化を持っているため、ミャオ族のダイニングへのアクセスを設けた。



ミャオ族との共有ダイニング

共有スペース  
個人居住スペース





# 苗

ミャオ族

人口  
739万 8035人。

居住地域  
主に貴州省南部、広西壮族自治区の大苗山、雲南省、四川省、湖南省、湖北省、広東省などに居住。

言語  
漢・チベット語系苗・瑶語族苗語系に属する苗語を使用。湘西(湖南西部)、黔東(貴州東部)、川康滇(四川・貴州・雲南の境界地域)の3大方言がある。従来自民族の文字がなかったが、1956年ローマ字を基にした文字が作られた。

歴史  
苗族の歴史は古く、その祖先は殷・周代の“蠻”(zǎng)人と考えられている。秦・漢代にはすでに湘西(湖南西部)、黔東(貴州東部)一帯に定住しており、その後西南地域の各山脈部に広がった。また、四川省、貴州省、湖南省の苗族は、神話において黄帝と戦って敗れた、“蚩尤”を祖先としている。紀元前2世紀にはすでに現在の居住地に定住していた。なお海南島の苗族は16世紀に広西壮族自治区から長征で来た人たちの子孫である。

名称  
苗族は“牡”、“舜”、“毛”、“果瓏”、“果瓏”などと自称しており、また一部の地方ではその住んでいる土地、服飾などによって、“長絨・苗”、“担猪・苗”、“長角苗”、“赤苗”、“黒苗”など異なった名称が用いられている。

祝日  
大部分のミャオ族は歌舞に長じており、旧暦6月6日の“採山花”は最大の祝日で、青年男女が歌のやりとりで伴侶を選び、芦笙舞を踊る。

特徴  
主に縫紉やトモロコシの栽培に従事し、麻などの経済作物とサンシチニンヅン、オニヤガタ、杜仲などの貴重な漢方薬材の栽培にもたずさわっている。紡織、ろうけつ染め、刺繍、首飾りなどの工芸品は内外に広く知られている。中でもろうけつ染めは1000年以上の歴史がある。また民族衣装も130種類以上あり、世界でも類を見ない多さとなっている。銀の飾りを用いた民族衣装、歌壇や竜船競渡などで有名な祭りにには大小の芦笙が登場する。



家族構成：夫婦、子供2人

同じく子供もちのウイグル族家族とひとつの院落をシェアする。



子供遊戯室

多民族の子供たちの半屋外遊び場

共有スペース

個人居住スペース



# 維吾爾

ウイグル族

人口  
721万 4431人。チュルク系。

歴史  
ウイグル族は中国北部での長い歴史をもつ民族の一つ。その祖先は紀元前3世紀に中国北部一帯に住んでいた遊牧民族のディンリインおよびその後のティエロに通ることができた。ティエロは西チュルク汗国の一部であり、7世紀に回コ汗国を打ち建て、唐朝と友好をむねとした従属関係を結んだ。回コは後に回鶻と改称され、9世紀に契丹に移住して地元の各民族の住民と融合し、次第にウイグル族に発展した。またイスラム化の完了後、遅くとも16～17世紀には、チュルク系言語を話し、イスラム教を信仰する、言語、文化、宗教などの面で共通する特徴を持つ人々の社会が、現在のウイグル族に直接つながるような形で、裏はコムルから西はカシュガルに至るまでのオアシス地域で成立していたと推定される。しかし、16～17世紀にウイグルという語が、彼らの自称として使用された形跡はない。

名称  
ウイグルとは、團結、連合の意味がある。ウイグルという民族区分と民族呼称は、1930年代と当時の中華民国の新疆省政府によって採用された。

居住地域  
主に新疆ウイグル自治区に分布し、天山以南の各オアシスに住む人が多いが、湖南省桃源県、常德県などにも住んでいる。

言語  
アルタイ語系突厥語系に属するウイグル語を使っている。中心、和田、羅布の3種の方言がある。アラビア文字を表音文字として使っている。

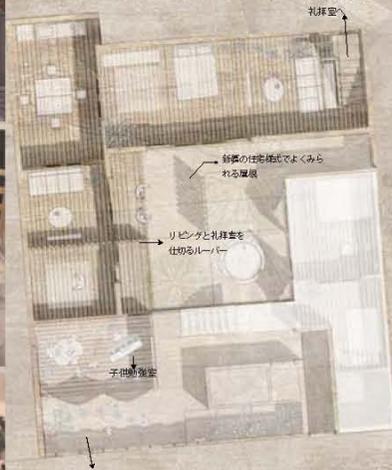
宗教  
全員的にスンニー派のイスラム教を信仰しており、とくに南疆新疆では日常生活の指針となり、モスクへの礼拝が励行される。

祝日  
イスラム教の2大祭り：ローザ節(イード・ル・フィドル)とクルバン節(イード・ル・アドハ)は盛大に挙行されている。ローザ節は日本の正月行事にあたるもので、イスラム暦9月のラマダーンと呼ばれる1ヶ月間の断食月(この期間中の食事が禁止される)が終了し、星曜の食事が再開されるイスラム暦10月1日に行われる。当日は断食月が終了したことを祝い、モスクに行き礼拝したあと自宅を祝宴が催される。クルバン節は、イスラム暦12月10日に行われる祭りで、神に感謝し、獣と踊りをともなう祝いを盛大に催す。



家族構成：夫婦、子供2人

同じ院落をシェアするミャオ族民との間で子供の活動を中心とするコミュニティが生まれる。



回廊と共用する礼拝室

新築の付完形式でよくみられる層屋

リビングと礼拝室を仕切るルーバー

子供遊戯室

半屋外遊び場

共有スペース

個人居住スペース





# 回

ホイ族

人口  
約80万人。  
唐の時代に移住したアラビア人、ペルシア人が源流。

歴史  
西暦7世紀、アラブとペルシアの商人が中国南東部沿海の廣州、泉州などに居住し始め、13世紀初、戦争のため中国西北部に移住させられた中央アジアのペルシア人とアラブ人が、ウイグル族、モンゴル族の人々と融合し、回族となった。

名称  
明王朝とそれにつづく清王朝時代においては、漢族は漢化されたイスラム教徒や新疆地区のトルコ系イスラムシユホイ教徒を、ともに回民と呼んでいたが、前者を漢回または熟回、後者を生回あるいは生回と、それぞれ異なった名称で呼ぶなどして区別した。

居住地域  
華北回族自治区をはじめほぼ中国全土に住んでいる。

言語  
殆どの人が中国語を使っている。  
一部の人がアラビア語とペルシア語に精通している。

宗教  
回族の人々はイスラム教を信ずり、モスクを回で居住している。

食文化  
宗教上の理由から豚肉を食用としない。そのため、食用としては羊肉があるいは牛肉が中心。また、アルコール類の飲用も禁止されているので、回族が経営している食堂では酒類はメニューにない。このように独自の飲食習慣があるため、飲食業を主とする事業を営む伝統があり、食堂の看板には“清真(qīngzhēn)”とある。

祝日  
回族の祭はイスラム教に基づいた、ラマダーン明けの祭、(イード・ル・フィドル、第10月1日)、犠牲祭(イード・ル・アドハー、第12月10日)、預言者聖誕祭(マワリド・ン・ナビ、第3月の10日)などがある。



## 家族構成：夫婦

彝族と一つの族譜を共有するが、礼拝堂や食事の場は宗教と食文化の近いウイグル族と共有する。



もう一つの回民

外側からの貯蔵庫(貯蔵庫)

ウイグル族と共有する礼拝堂

共有スペース

隣人居住スペース



# 彝

イ族

人口  
約657万2173人。チベット系。

歴史  
彝族の源流は陝西、甘肅、青海の西北高原に住んでいた羌族と言われており、その分派が南下して現在の南西地域の原住民と融合して形成された。

名称  
隋・唐代には“烏蛮(ウーマン)、元・明以降は“羅羅(ラーラーン)”と呼ばれていた。  
地域によって“族彝”、“族彝”、“羅武”、“羅羅”、“米撒弄”、“撒尼”、“阿細”、“阿西”など多くの自称がある。新中国成立以来で一部の地域では奴隷社会が続き、外部との接触も殆どなかった。彝族では黒は人間世界の色、白は精神世界の色とされ、奴隷主だった黒彝族は衣類から日常生活用品まですべて黒で揃える。

居住地域  
主に雲南省、四川省、貴州省、広西壮族自治区に居住。

言語  
漢・チベット語系のチベット・ミャンマー語族彝語分支部に属する彝語を使用。6種類の方言があり、彝文字と呼ばれる表音文字を持つている。

性格  
彝族はプライドが高く、人情、信義と義理を重んじ、善を大切にするとされる礼儀正しい民族。来客があると、さっと駆けつけて出迎える歌を歌いながら酒を勧め、回礼準備の上座に座らせる。  
また、彝族の男性は女性をのしつたり蔑つたりしてはいけないという決まりがあり、“立派な男なら妻を辱らぬ!”ということわざもあり、たとえ敵でも女性には殺さない、という掟がある。

風習  
嫁に行く前の脚が地面につくと災いを招くという言い伝えがあり、背負われて嫁入りする“背負い嫁”が行われている。かつぐのは新郎の弟で、結婚式の3日前に嫁入り道具一式と共に新郎の家に運ぶ。  
結婚式では充分に嫁入り道具一式と共に新郎の家に運ぶ。  
結婚式では充分に嫁入り道具一式と共に新郎の家に運ぶ。  
結婚式では充分に嫁入り道具一式と共に新郎の家に運ぶ。

祝日  
最も盛んな祝日はたいまつ祭：火把節で、旧暦6月24日から行われる。厄除けと豊作を祈願する祭り。豊年あり、ファイヤーあり、レスリングありの2日間。祭りでは着飾った若い男女のフォークダンスもあり、一種のお見合いの場ともなっている。



家族構成：夫婦、子供2人



空ける間隙



共有スペース

隣人居住スペース



# 徳昂

トーン族

人口  
1万5462人。モンクメール系。

**歴史**  
徳昂は、もともと“崩騰族”と言い、中国南部辺境で最も長い歴史をもつ少数民族の一つ。古作の漢人をルーツとし、穏平と密接な関係がある。紀元前2世紀頃に、怒江沿岸一帯に居住し、かなり早くから保山、徳昂一帯の開拓にたずさわった。史書に記述されている范寧部族が徳昂族の祖先と考えられている。

**名称**  
隋・唐の時代に“梵室”、“摩子室”、“望童子室”と呼ばれ、前後して漢、晋王朝および南朝、大理国に伝い、元代以降タイ族土司の所屬になった。1983年9月に、現在の徳昂という名称が正式に採用された。徳昂とは、切り立った崖と意味がある。

**居住地域**  
主な雲南省徳昂族自治州の西貢と臨滄地区徳昂県及び盈江、瑞麗、蘭州、保山、梁河、騰龍、耿馬等に居住している。そのうち西貢三台山と鎮源県軍弄などに集中的に居住している。

**言語**  
南アジア語系属・徳昂語系に属する徳昂語を使用。納登、布魯、若葉の3方言に分かれている。大部分は徳昂の言葉、中国語あるいは景族の言葉に精通している。自民族の文字がなく、中国語あるいは景族の文字を使っている。景族には景族に近いが、文化的には当地地の景族の影響を強く受け、漢語なども共通する。

**宗教**  
徳昂は、小乗仏教を信仰している他、薩神信仰もあり、一般的に祖先に祭を祭る儀式を行う。

**食文化**  
トーン族徳昂は、古来、漢茶を飲む習慣があったため茶の栽培に長けており、“古老茶農”と呼ばれている。主に農業に従事し、水稲、トウモロコシ、蕎麦、イモ類を栽培している。その他竹や茅の工芸品の製作と野生植物の収集にも長けている。銀織工は彼らの伝統工芸として有名。

**衣装**  
トーン族(徳昂)族の民族衣装は非常に特徴的で、毛糸織工の飾りを男性は両肩や胸、女性はスカートや首飾りにつける。また、敬虔女性は銀織工の刺当てを身につける習慣がある。

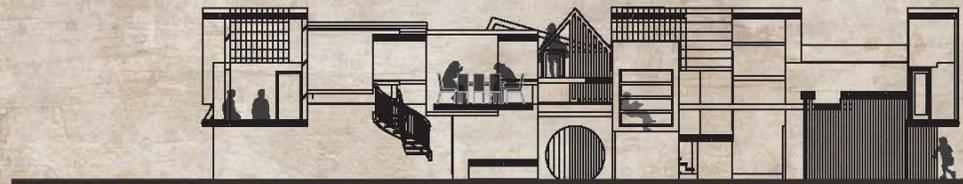


家族構成：夫婦、息子夫婦、子供2人

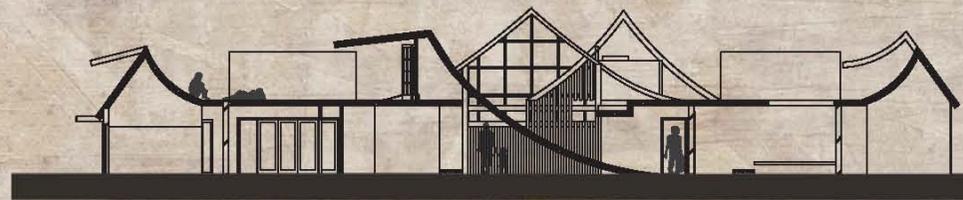
同じ産物をシェアするミャオ族長との間で子供の通塾を中心とするコミュニティが生まれる。



共有スペース



CC' 断面図 S= 1/100



DD' 断面図 S= 1/100



EE' 断面図 S= 1/100



FF' 断面図 S= 1/100

